平清盛と尾道の関係論

第１点、尾道の創造主は平清盛である。

第２点、尾道は清盛のビジネス魂継承地である。

■「第１点、尾道の創造主は平清盛である」について

港まち尾道の歴史は後白河法皇が嘉応元年（1169 年）に大田庄の倉敷地に指定したことに始まるとされています。今年は平成 24 年（2012 年）ですから、港まち尾道は 843 周年を迎えていることになります。港まち尾道の原点はどんな社会情勢だったのでしょうか。

後白河法皇と平清盛は言わば義理の兄弟であり、日本史始まって以来、初めて武士による政治を創造した車の両輪の関係にあります。そして２人の関係を決定づけた象徴的なパフォーマンスの１つが、後白河法皇への大田庄の寄進です。大田庄を寄進したのは平清盛の五男、平重衡です。尾道市史には重衡が「早く尾道村を倉敷地にしてくれ」と伝えた高野山文書が記載されています。つまり大田庄は清盛の支配下にあり、清盛の思惑で動いたと想像できます。

では後白河法皇はどんな人だったのでしょうか。著書「後白河院」には、春夏秋冬の四季にわたり、昼はひねもす謡い暮らし、夜はよもすがら謡い明かさぬ日はなかったと表現しています。そしてそれほどまでに熱心に謡っていたのは「今様」という謡い方です。当時、流行し始めたナウい謡い方ですから、後白河法皇を現代風に表現すれば、雅なロックンローラーといった感じでしょうか。そののめり方も尋常ではなく、父親の鳥羽法皇すら「天皇の器ではない」と嘆いていたようです。

反対に清盛は日宋貿易の重要性を見抜き、宋からいまの神戸港、福原までの瀬戸内海航路を開発する国家的プロジェクトを強力に推進しており、そのビジネスの先見性は、先ごろ株式上場により１兆６千億円あまりの資産家になったフェイスブックのマーク・ザッカーバーグＣＥＯを超える超一流の経営戦略家だったと思われます。

この２人の人柄を考え合わせれば、尾道の将来性を見抜き、尾道を倉敷地に指定し、瀬戸内海航路の拠点港に組み込む計画の本当の立案者は清盛だったに違いないと思うのです。後白河法皇の威光を利用して陸路の縦軸、船の横軸が交差する交通の要衝、瀬戸内の十字路、尾道の原型を創造したのは平清盛だった言うべきでしょう。

■「第２点、尾道は清盛のビジネス魂継承地である」について

尾道は大田庄の倉敷地に指定され、港まちとしての歴史が始まりました。つまり瀬戸内海を行き来する船が立ち寄る重要港として発展を遂げました。北前船も立ち寄り、尾道に

問屋業が発展しています。その頃の問屋業は金融業と境目のないような業態だったようで、問屋を相手に蔵置き商品を担保とする金融業態の一つ、並合業（なみあいぎょう）もありました。尾道と縁の深い旧財閥の住友家は江戸時代の混乱期に止めていた並合業を再開、明治 6 年ごろには尾道分店を開設しています。そして山陽鉄道が開通した翌年の明治 25 年に尾道支店に昇格させ、明治 28 年 5 月には有名な尾道会議を開き、住友銀行の設立を決議しています。それ以前には大阪の銀相場をいち早く知り、差額を商いとしていた尾道商人もいます。また銀山街道に象徴されるように、貨幣の原料となる銀も石見銀山から尾道まで運ばれ、尾道港からヨーロッパへと輸出され、世界の銀相場を左右した歴史もあります。こうした史実に基づき振り返ってみると、尾道は金融業の先進地、金融業のメッカであり、物流とともに金利など金融経済を意識するビジネス魂を培ってきたのが尾道商人だったと言えるでしょう。

承知の通り、日本に本格的な貨幣経済をもたらしたのは、平清盛です。当時、アジアの英知を結集した書物「太平御覧（たいへいぎょらん）」を日本に輸入し、アジア統一通貨の可能性さえも読み取り、中国の宋が鋳造していた宋銭の輸入によって貨幣経済の基盤をつくりました。つまり経済大国日本の歴史的基盤整備を行ったのが、平清盛だったと言っても過言ではありません。その証拠となる宋銭は全国各地で埋蔵文化財として発掘されていますが、ここ尾道市内からも大量に出土しているのです。

以上のように尾道の物流と金融業の歴史は、清盛が描いた国際的、経済的総合計画をぴったりと踏襲した歴史になっています。「尾道商人のビジネス魂は世界を見据えた平清盛が海を見ながら抱いたビジネス魂を継承している」と言うべきでしょう。

そして尾道との関係はほかにもあります。後白河法皇とは異母兄弟の近衛天皇の延命を祈って母・美福門院が全国のお寺に奉納した貴重な仏画の一つが尾道に残っています。持光寺の国宝「普賢延命菩薩画像」です。また向島と木曽義仲との関係もあります。日本経済に多大な影響を与えた清盛ですが、尾道との関係もまだまだ深い因縁がありそうです。

参考図書

「平清盛のことがすべてわかる本」（中丸満著、ＮＨＫ出版）
「後白河院」（五味文彦著、山川出版社）
新修「尾道市史」（尾道市）第１巻

平成 24（2012）年 6 月 15 日

文責　尾道歴史人物研究会